

# 書評 小林賢章著『「暁」の謎を解く』

吉 海 直 人

—

このたび勤務先の同僚である小林賢章氏が、平安時代の時間表現についての研究を角川選書の一冊として公刊された。まずは出版のお祝いを申し上げたい。

実は本書に先立って、小林氏は二〇〇三年に和泉書院から『アカツキの研究平安人の時間』という本を出しておられる。これは「明く」という時間動詞と「暁」という特定の時間帯に絞った、日本で最初の古典における時間表現に関する研究書である。

それまで時間表現に関心の薄かった私は、前著を大変興味深く読ませていただいた。そしてこの研究成果は、『源氏物語』の研究にも応用できるのではないかと思に至った。そこで小林

氏のさらなる研究の進展を期待し、一刻も早く二冊目の研究書を出されることをお勧めした。それもあって私は本書の刊行を誰よりも喜んでいる。

ところで本書は、前著からちょうど十年後の出版であった。もちろん前著の単なる焼き直しでは、編集者も首を縦に振りにくいだろう。前著をもとにしてはいても、徹底的に日付変更点をこだわり続けている小林氏の情熱（執念）が、本書の刊行を可能にしたといっても過言ではあるまい。前著をお読みになった方も、本書を読んでいただければ、そのことが実感されるはずである。本書は「暁」の研究という以上に、午前三時という時間の重要性をこれでもかと畳み掛けている点に特徴がある。いわば本書は〈午前三時〉の研究なのである。これも他に例を見ないものであろう。

早速本書の内容に分け入ってみよう。まず小林氏は「はじめに」の中で、

『源氏物語』中に使用されている時刻表現は、子の時1回、丑の時0回、寅の時0回、卯の時1回、辰の時1回、巳の時2回、午の時0回、未の時2回、申の時3回、酉の時0回、戌の時1回、亥の時0回である。

と述べておられる。平安時代を対象にされる以上、『源氏物語』は避けて通れない作品なので、むしろ積極的に取り込まれているであろう。それはそれとして、私はこの数字を見て違和感を覚えた。というのも、小林氏はここで寅の時の用例数を「0回」とされていたからである。私の記憶では、前著の第一章に賢木卷の「寅一つ」が引用されていたはずだ。その大事な例がどうして本書で忘却されているのだろうか。

気になって『源氏物語大成』の索引で調べてみたところ、

「子の刻」1例（梅枝卷）・「丑」1例（桐壺卷）・「寅一つ」1例（賢木卷）・「卯の刻」1例（行幸卷）・「辰の刻」1例（松風卷）・「巳の刻」2例（玉鬘卷・藤裏葉卷）・「午の刻」1例（胡蝶卷）・「未の刻」2例（蛩卷・若菜上卷）・「申の刻」3例（桐壺卷・賢木卷・須磨卷）・「酉」0例・「戌の

刻」1例（梅枝卷）・「亥」0例

という結果になった。小林氏の調査（十一例）よりも丑・寅・午の各一例、計三例が増加できた。わずか三例の相違（増加）ではあるが、「寅一つ」（賢木卷）のみならず「右近の司の宿直奏の声聞こゆるは、丑になりぬるなるべし」（桐壺卷）も看過できない用例と思われるので、増刷される際には是非修正していただきたい。

## 二

次に本書と前著との違いはどうなっているのか、気になったので調べてみた。するとすぐに目に付いたことがある。前著の「はじめに」に掲載されている図表と、本書の「はじめに」に掲載されている丸い図表を比較したところ、大事な「暁」の間帯が本書では短くなっているではないか。

前著における「暁」は、午前三時から日の出前までになっていた。それが本書では午前三時から午前五時までの二時間に限定・短縮されていたのである。要するに「暁」の始まりは変わらないが（これが論の根本）、終わりの時刻が変更・修正されていたのである。これは私にとってはかなり大きな改正に思え

た。

これに関して小林氏は、前著においても平安朝は「定時法」であることを主張しておられた。だからこそ視覚で判断できない午前三時が、「日付変更時点」として固定されるのである。それにもかかわらず、「暁」の終わりが日の出前というのでは、季節によって時間が異なることになる。それこそ「不定時法」である。そうなると「暁」は、定時法で始まって不定時法で終ることになるわけだが、これは説明としてやはり不備であろう。

おそらく小林氏もそのことに気づかれたに違いない。だからこそ本書では、前著の定義を訂正して、終わりの時間も「定時法」で首尾一貫されたと推察される。これこそが十年間の研究の進展・成果ということになる（もはや前著から引用するのは危険？）。

ただしこの大きな変更について、本書ではそのことがきちんと表明されていない恨みがある。わずかに、  
以前は、薄暮に暁とつとめての境を置いたが、少なくとも平安時代では、暁とつとめての境は午前五時とするのが妥当では、と今は考えている。（65頁）

と述べられているに過ぎない。この曖昧な物言いでは、明確に

前著を修正されているとは受け取りにくいのではないだろうか。また「今は考えている」という表現では、「薄暮」説をきっぱり否定したことにはなるまい。それこそきちんと論証していたきたい。

それだけではない。この修正は自ずから他の時間表現とも連動することになる。まず「つとめて」の始まりの時間を修正しなければならなくなる。前著では「つとめて」について詳しく言及されていなかったが、本書の第二章の後半では、

平安時代の暁は寅の刻（午前三時～午前五時）だった。それに続いて、卯の刻（午前五時～七時）以降巳の刻（午前九時～十一時）までがつとめてだった。つとめてが単独で使われるときは、卯の刻を意識して使われることが多かった。（65頁）

と、「暁」につながる時間帯として解説しておられる。もちろん第二章は「つとめて」の研究ではなく、あくまで「暁」の終了時間（「つとめて」との境界線）を決定することに主眼があった。その意味では、改めて「つとめて」を独立させて論じた方がわかりやすいので、小林氏の「つとめて」論に期待したい。

三

それにさらに連動して、「あさぼらけ」「しののめ」「あけぼの」の定義はどうだろうか。私は原著の「暁」の定義から、それを「暁」の後半部（午前五時以降日の出前まで）と勝手に位置づけていた。ところが本書では、午前五時で「暁」が終了してしまうことになったので、「あさぼらけ」「しののめ」「あけぼの」をどのように位置付けたいのか迷ってしまう（季節による変化にまったく対応できない）。

単純に「暁」終了後から日の出前までと割り切ることもできるが、そうすると「暁」と「あさぼらけ」「しののめ」「あけぼの」は全く時間的に重ならないことになる。また始まりが定時法で終わりが不定時法という原著同様の不備が新たに生じてしまいかねない。

これに関して小林氏も説明不足に気づかれたのか、本書とは別に「アサボラケ」考（同志社女子大学学術研究年報63・二〇一二年一二月）を発表しておられる。論文の刊行年次は本書出版の前だが、雑誌の方がスピードイーに刊行され、単行本は刊行までにかなり時間がかかったということで、これを本書へ

収録する時間的余裕はなかったようである。

この論によれば、「あさぼらけ」は「暁」と同じく午前三時から始まるとされている。これもかなりの驚きであった（従来の説とは大きく異なる）。ただしその終了時間についてははっきり言及されていない。かろうじてこの論の末尾で、

アケボノとアサボラケの違いは、おそらく時間帯を重く見るアサボラケと視覚性が強いアケボノといった違いがあったのではと私に推測を述べておく。実際の時間帯はそれほどの差がないという考えである。

と述べられているが、暗い「あさぼらけ」と視覚を重視する（明るさが問題となる）「曙」の時間帯に差がないというのでは、説明として納得できそうもない。小林氏は午前三時に論を集中させているので、終了時間にはあまり関心がないらしいが、それでもどのように重なるのか分けられるのか、できるだけわかりやすく説明していただきたい。という以上に、是非斬新かつ納得できる「曙」論を発表していただきたい。

ところで図表を見ていて気になったことがある。日付変更時点である午前三時に矢印が向っているのは当然であろう。気になったのは実線と点線が用いられているところである。これは

どのように理解すればいいのだろうか（その説明はどこにも見当たらない）。

一例として「今宵・夜もすがら・夜一夜」をあげると、亥の刻以前は点線で、子の刻・丑の刻は実線になっている。実は前著の図表を見ると、亥の刻以前も実線になっていた。これに関連して「ヨモスガラ考」の末尾で、「ヨモスガラの始まりは日没であったが、その終了時点は午前三時であった。」（124頁）と論じられている。そうなると点線もその時間帯に含まれることになる。これを斟酌するに、実線の方が点線より重要ということとであろうか。わざわざ点線にして表示しているのだから、是非その意図（実線と点線の違い）を説明していただきたい。

ついadenaがら前著でも、「この時代のヨモスガラは日暮れからはよいのだが、夜明け前までということではなくなるのである。」（112頁）と述べられていた。それが本書では、始まりの時間についてのコメントは一切認められなくなっている。やはり小林氏の関心は、午前三時に集中していることが読み取れる。ただし前著の説がそのまま生きているとすれば、「夜もすがら」は日暮れから始まることになるが、それなら点線もそこまで延ばすべきであろう。

#### 四

ここで参考までに本書の目次を掲載しておきたい。書名に「謎を解く」とあるが、これはあくまで読者の購買意欲をそそる便法であり、本書がいわゆる「謎解き本」でないことはいうまでもない（目次に「謎」という表現は使われていない）。

#### 目次

- はじめに —— 『枕草子』二九三段を例にとつて
- 第一章 平安時代、日付はいつ変わったか
- 第二章 「暁」 —— 男女の思いが交錯した時間
- 第三章 「有明」 —— 平安人の美意識が重なる言葉
- 第四章 動詞「明く」が持つ重要な意味
- 第五章 「夜もすがら・夜一夜」 —— 平安人の「一晚中」とは
- 第六章 「今宵」 —— 今晩も昨晚も
- 第七章 「夜をこめて」 —— いつ「鳥の空音」をはかったか？
- 第八章 「さ夜更けて」 —— 午前三時に向う動きあてがき

これを前著と比較すると、「はじめに」の副題に『枕草子』二九三段〕があげられている点が目される。前著の目次に『枕草子』は見られなかったが、本書では目次だけでなく帯の宣伝文句にも、「暁」は真夜中だった！ 枕草子や源氏物語の読み方を変える平安時代の、時間表現の新説！」と書かれている。ここから本書では『枕草子』がかなり重視されていることが窺える。

そのことは本書にどれだけ『枕草子』から引用されているかを見れば、よりはっきりする。第一章には二七四段が引用されているし、第二章には六〇段・一五四段、第五章には一二五段、第七章には一三〇段が引用されている。特に第七章「夜をこめて」は『枕草子』が論の中心になっている。こうして見ると、「暁」の視点は『枕草子』の研究にかなり有効ということになりそうだが（『源氏物語』はもちろんだが『更級日記』の引用も多い）。

目次全体を見渡したところ、前著の後半に置かれていた「第八章万葉の日付変更時点」「第九章ヨルヒル考」「第十章覚一本の日付変更時点」の三章が抜け落ちていることに気づく。『万葉集』・『平家物語』などを省くことによって、戦略的に平安朝

に限定した論として構成されていることが読み取れる。逆に前著になくて本書に初めて登場しているのが「第七章夜をこめて」「第八章小夜更けて」の二章である。せっかくなので新しく加わった二章について、さらに詳しく内容を確認してみたい。

## 五

まず「夜をこめて」だが、この歌は『枕草子』あるいは百人一首で有名である。ここで小林氏は、後接する動詞によって意味を二分されている。後接するのが継続動詞なら、「夜をこめて」は午前三時までを意味し、後接するのが瞬間動詞なら午前三時を越えた時点としておられる。要するに「夜をこめて」は、午前三時を跨いで使用されていることになる。これは午前三時までが午前三時からかを問題にしてこられた小林論にとつては、かなりゆゆしい問題ではないだろうか。それにもかかわらず七章では継続動詞のみが重視され、瞬間動詞の用法が軽視されているように思えてならない。

まして『枕草子』の場合は、本当の鶏の声ならぬ鶏の鳴き真似（しかも漢籍引用）である。これについて小林氏は何もコメ

ントされていないが、本来「鶏鳴」は男女の別れを告げるシグナル（時計）であった。だから「鶏鳴」は男女の後朝の別れに機能するのである。そのことに触れないで、正反対の男女の逢瀬に適応させようとするのは、いささか無理があるのではないだろうか。

もちろんこの場合は、「鶏鳴」ではなくあくまで「鶏の鳴き真似」なのだが、それでも事情は変わるまい。小林氏は継続動詞にこだわって、「一晚中鶏の鳴き真似をしても逢いません」としておられるが、現実問題として一番鳥が一度でも鳴いたら、それこそ小林氏の主張されている「暁」の到来を告げるシグナルなのだから、当然、男女の後朝の別れの合図として機能するはずである。<sup>1</sup>という以上に鶏は一晚中鳴くものではあるまい。

『枕草子』の本文に依拠すれば、第一に行成は丑の刻前に清少納言の元を去っている。これは瞬間動詞となるはずである。それを中国の「鶏鳴狗盗」の故事に重ねて、「鶏の声に催されて」と言ってきたのであるから、これも瞬間動詞的解釈のはずである（「鶏鳴」は夜中に一度試みられただけで関は開門している）。

それを踏まえた上で、逢坂の関の場合だけは帰るのではなく

逢うことに転換されている。たとえそれが比喩であっても、このベクトルのズレは問題にならないのだろうか。実は『枕草子』を研究しておられる藤本宗利氏は、そのことをなんと合理化するために、

その鶏の声は、きつと恐ろしい私のもとから早く逃げだしたくてうずうずしていた誰かさんがこしらえた、偽り事でございましたでしょう。

（『枕草子研究』風間書房・平成14年2月）  
と、斬新な解釈を提示しておられる。藤本氏はあくまで後朝風に、函谷関の関守は騙せても、賢い関守である私は鶏の鳴き真似に騙されてあなたを早く帰したりはしません、と訳しているのである。

話の流れをスムーズにとらえれば、無理に鶏鳴によって逢うとするより、後朝の別れのこととする方がずっとわかりやすいというより男女の逢瀬が前提となって後朝の別れがあるのだから、後朝の別れによって男女の逢瀬が既成事実になっているとも読める。もちろんそれは事実ではなく、後宮における大人の擬似恋愛遊戯であることは言うまでもない。<sup>2</sup>この点について藤本論を踏まえた上で、小林氏の見解（解釈）をお聞かせいただ

きたい。

もう一つだけ気になることがある。それは結論部分に、

この歌における夜をこめての時間を具体的にいえば、午前一時から午前三時となることは本文からわかる。「一晚中」、「夜通し」よりは短い時間だが、夜をこめてには現代語には相当する単語がない。終了時点だけ意識して、「一晚中」、「夜通し」と口語訳しておくのが、ベターな訳であると思われる。

とある点である。これも終了時点（午前三時）に意識があるからなのだろうが、この場合は午前一時以前を捨象した解釈（丑の刻以前が丑の刻にすりかえられている）を提示されていることになる。それにもかかわらず、わずか二時間を「一晚中」「夜通し」と訳すというのは、時間帯としてはあまりにも短すぎると思えるが、その点はいかがであるうか。こういった私の素朴な疑問点について、是非わかりやすく説明していただきたい。

## 六

最後に「小夜更けて」論であるが、小林氏はこれを「午前三時に向う動き」としておられる。そのことを証明するために、まず『万葉集』の歌を例示され、「小夜更けて」が「暁」と連続していることを論じておられる。また「小夜更けて」が「夜中」や「さ夜中」と重なっていることも確認されている。その点に疑問はない。

その上で、平安朝の用例の検討が行われるわけだが、どういうわけか肝心の「小夜更けて」の用例は取り上げられず、類似する「夜更け」「夜は更け」「夜や更け」の用例に置き換えて検討しておられる。もちろん「小夜更けて」の「さ」は接頭語であるから、「夜更け」と置き換えてもかまわないのかもしれないが、「小夜更けて」には一つ大事な用法があった。

それは『万葉集』の例を含めて、歌語として確立していることである。平安朝においても、和歌に詠まれた「小夜更けて」の用例が多数存在する。小林氏は前章において百人一首の「夜をこめて」歌を例に出しているのだから、「小夜更けて」にしても百人一首にある赤染衛門の「やすらはで」歌と参議雅経の

「み吉野の」歌の二例くらいは引用していただきたい。<sup>(3)</sup>特に赤染衛門の歌は、小林氏の主張される「暁」に連続する用例と思われる。

そういった豊富な「小夜更けて」の用例（和歌）が存するにもかかわらず、小林氏はあえて「夜更け」「夜は更け」「夜や更け」の用例を検討された上で、

結論として、平安以降の用例だが、「夜更けて」は、「丑の杭刺す」や「丑二つ」「丑三つ」の時間と共に起していた。とかにも「小夜更けて」の検討結果のように結論付けられるのは、論証の信頼性としていかがであろうか。たとえ「小夜更けて」と「夜更け」が同一の時間帯を示すものであっても、だからといって「小夜更けて」の用例の検討が不要なはずはあまい。ここは是非「小夜更けて」の検討も徹底的に行っていたいただきたい。

以上、本書を熟読した中から生じた私の素朴な疑問点を列挙させていただいた。ついむきになって、重箱の隅をほじくるような点が多くなったことをお許しいただきたい。私は小林氏の時間表現研究は重要であり、『源氏物語』や『枕草子』研究にとどまらず、古典文学研究全体に大いに役立つものと確信して

いる。そのため私自身、これまで自分の論文の中にしばしば小林論を引用させていただいている。そのこともあって、本書の書評を書かせてもらった次第である。小林氏の今後さらなる研究の進展を心からお祈りしたい。

二〇一三年三月二十五日 角川選書 二二四頁 一七〇〇円

〔注〕

(1) ただし「夜もすがら妹が結べる下紐は鐘とともにぞうちとけにける」は題に「及暁遂会恋」とあるので、暁に至って逢瀬をもった例にあげられる。

(2) 「夜をこめて」歌に関しては、以下の拙論も参照していただきたい。吉海「清少納言歌（六二番）の背景——行成との擬似恋愛ゲーム——」「百人一首を読み直す——非伝統的表現に注目して——」（新典社選書 平成23年5月、同「枕草子」「頭の弁の、職にまゐりたまひて」章段について」（教室の内外（3））所収）同志社女子大学日本語日本文学24・平成24年6月参照。

(3) 雅経の「小夜更けて」については、拙論で「秋風が吹く」の掛詞となっていることを論じた。吉海「小夜更けて」考（解釈61・9、10・平成27年10月）。